

1 結果のポイント

- ・偏差値平均は前年度より2.4ポイント下回っている。
- ・「活用」の偏差値は、「知識」よりも1.1ポイント下回っている。
- ・当該学年が小学校第5学年時よりも4.5ポイント下回っている。
- ・「領域」「観点」別では、全ての項目で目標値を上回っている。

2 課題が見られた問題と指導の改善事項

(1) 読むこと（説明的文章⁴）（1）（4）

①出題のねらい

（1）文章の展開に即して内容をとらえることができる。【知識】

（4）文章の内容をとらえた上で、それを別の事例にあてはめることができる。【活用】

②問題内容

説明文の内容を読み取る。

③解答状況

（1）【市：52.1% 県：60.1% 目標値：60%】

（4）【市：54.8% 県：60.6% 目標値：55%】

④指導の改善事項

まとまった量の文章を短時間で読み、内容をとらえて読む力に課題がある。説明的文章には、説得力を高める根拠となるように具体的な事例がいくつか述べられる。そのため、「それぞれがどのような意図によって述べられ、表現の工夫によりどのような効果をもつのか」等を分析する指導が必要である。また、段落の関係から文章全体の構成を考えたり、事実と意見を区別しながら読んだりする学習も欠かせない。

教材についても科学的な説明的文章を選び、未知の言葉であっても既知の言葉を使用して考えたり、文脈から捉えたりして読む学習が求められる。

(2) 読むこと（文学的文章⁵）（1）

①出題のねらい

場面の展開をとらえることができる。【知識】

②問題内容

文学作品の内容を読み取る。

③解答状況

【市：55.9% 県：56.9% 目標値：60%】

④指導の改善事項

時間や場所を読み取って場面分けをする問いであった。2つめの場面が他に比べて短いために、解答を迷った生徒も多かったと考えられる。しかし、「場面の移り変わりに注意しながら読む」ことは、小学校での既習事項の発展でもある。「時間」「場所」を表す言葉等を手がかりにして、場面の変化を捉える学習を再度確認しておく必要がある。

(3) 言語活動に関する問題（⁶）（3）

①出題のねらい

紹介カードの特徴をとらえた上で、その特徴を生かして新たにカードを書くことができる。【活用】

②問題内容

本の紹介カードの特徴を書く。（使用語句、字数制限あり）

③解答状況

【市：38.3% 県：46.7% 目標値：50%】

④指導の改善事項

説明的文章の指導においては、要旨をとらえるだけでなく、得られた情報と非連続テキストの情報とを合わせて考えたり、記述や論の展開の特徴について考えたり、内容から筆者の意図を捉えたりする等の様々な力を付けることが求められる。ゆえに順序よく詳細に読解するという指導ではなく、目的に応じて内容を整理する、必要に応じて引用する、複数の資料を比較する、別の言葉で言い換える等様々な活動が必要である。

当然、付けるべき力は、知識として学ぶのではなく、言語活動を行う中で培われるものである。付けた力を付けるための言語活動を単元に位置付けた実践を行わなければならない。

(4) 言語や文化についての知識・理解 (3) (4)

①出題のねらい

故事成語について理解している。【活用】

②問題内容

「他山の石」を正しく説明しているものを選ぶ。

③解答状況

【市：44.1% 県：43% 目標値：50%】

④指導の改善事項

ことわざや故事成語等を知識として覚えていくことは重要である。しかし、語彙を増やすためには、実際の生活の中でどのように使用するのか、どのような場面で使用されるのか等についても併せて学習していく必要がある。

(5) 話すこと・聞くこと (1) (2) (3)

①出題のねらい

(2) 聞き手に理解してもらうための話し方の工夫を聞き取ることができる。【知識】

(3) 司会者の工夫を聞き取ることができる。【知識】

②問題内容

話し合いの内容を聞き取る。

③解答状況

(2) 【市：55.9% 県：55.8% 目標値：60%】

(3) 【市：43.6% 県：48.1% 目標値：50%】

④指導の改善事項

両問とも聞いた内容そのものではなく、「話し方」「進め方」等の工夫についての理解を問うものであった。やはり「工夫」を判断するためには、「話すこと」や「話し合い」の指導において、説得力をもたせるための材料収集や効果的な構成の工夫等について、実際の活動を通して指導していく必要がある。また、グループや全体で見合うことで、客観的に工夫を見付ける学習も有効である。

さらに日頃から、表現する場面において話しぶりや書きぶりで不十分な点が見られる際には、丁寧に指導していくことも必要である。

(6) 書くこと (7)

①出題のねらい

自分の考えを明確に書くことができる。【知識】

②問題内容

作文（グラフを読み取り、自分の考えを3段落構成で書く）

③解答状況

【市：65.7% 県：71.1% 目標値：70%】

④指導の改善事項

「指定された文字数で書く」「3段落構成で書く」「読み取った内容を明確に書く」は目標値を上回っている。自分の考えを明確にもつためには、事実と意見を区別しながら読むことや、筆者や友だちの考えと自分の考えの共通点や相違点を考えながら読むことなどを意識させながら指導することが大切である。その上で「自分の考えを書く」活動を適切に取り入れていく必要がある。

3 指導の改善のポイント

(1) これからの国語科の授業づくりの基本的な考え方

①主体的・対話的で深い学びを促すために、以下の8点について留意し、単元構想と授業実践を行うことが大切である。

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| ア 児童生徒が興味をもつ教材・題材 | イ 魅力的な課題の提示、児童生徒による課題の発見 |
| ウ 学習の見通し、本時の目標（めあて）の明示 | エ 課題解決的な学習、既習事項を活用する学習 |
| オ 自分の考えを発表・交流する機会 | カ 「できた」「わかった」の実感 |
| キ 「できたこと」「わかったこと」の振り返り | ク 日常生活、社会生活への広がり |

②国語科は、生徒に付けたい力を付けるために、言語活動を単元全体で取り扱い、言語活動を通して指導事項を指導する教科である。学習指導要領改訂後も、国語科で育成した言語能力は、他教科の基幹になることは言うまでもなく、今後とも更なる言語活動の充実を図り、授業改善を推進していくという方針は不変である。

(2) 国語科授業改善の方向性

新学習指導要領を鑑み、これまでの国語科の授業を振り返った上で国語科の授業改善の方向性を以下に示す。（具体的留意点）

①適切な言語活動の設定とその充実

ア) 付けたい力を付けるのにふさわしい言語活動であるか

- ・単元を構想する際には、付けたい力と言語活動との領域のミスマッチはないか、よく吟味する必要がある。そして、主たる学習活動の設定時間数は十分であるかも併せて考えておきたい。
- ・言語活動を設定した後、課題解決のための手法は適切であるかを考えていく。場合によっては、生徒の学習状況（付けたい力が付いているのか等）を把握しながら、弾力的に修正していくことも大切である。

イ) 多様な図書資料等が有効に活用されているか

- ・目的に応じた言語の能力を身に付けさせるために、国語科の教科書だけでなく、多様な図書資料等（書籍、新聞、その他のメディアからの情報）を用いることが必要である。多様な図書資料等を活用する中で、例えば必要な情報を素早く見付ける読みや、必要な部分を詳細に分析する読みの指導が可能となる。

また、自分の考えを深めたり広げたりするためにも学校図書館等を利活用し、多様な情報に関連づけて読むことの指導にあたる必要がある。

- ・そのためにも、「不読者」を少なくする取組が必要である。1ヶ月に1冊も本を読まない生徒の割合は全国平均の約1.6倍も多くなっている。まとまった量の文章を素早く読むことが苦手な生徒の学力を育成する基盤として、本に慣れ親しませることが求められる。また、読書によって豊かな語彙形成につながったり、自分を高めたりできるという視点からも、引き続き読書指導の在り方を見直す必要がある。

質問紙：「あなたはこの1ヶ月の間に本を何冊くらい読みましたか。」（単位は％）

冊数	0	1～2	3～4	5～6	7～8	9～10	11～20	21～30	31冊以上	その他
全国	10.7	41.3	24.7	10.9	4.6	3.1	2.8	0.7	1.0	0.2
大分県	15.9	38.9	20.4	9.2	4.1	4.5	3.6	1.1	1.9	0.3
国東市	16.0	36.7	22.9	10.1	4.3	3.2	2.7	0.5	2.1	1.6

ウ) 既習事項（または知識・技能）を活用する言語活動であるか

エ) ウ) のために知識・技能の確実な定着を図っているか

オ) 生徒の興味関心を喚起する言語活動であるか

- ・興味関心を喚起する言語活動を行えば、国語科の学習が「好き」という気持ちが強くなり、学びに向かう力につながる。

カ) 発表や交流活動を設定した言語活動であるか

- ・本当に話し合いが必要なのか、必要であれば、どのような形式の話し合いが適切であるのかを吟味した上で行うことが大切である。また、ペア学習やグループ学習のみに終わらないために、生徒自身に気付かせることと教師が教えるべきことの整理をしておく必要がある。
- ・話し合う手段をとる際には、「何のために」「何の力を高めるために」行うのかということ、生徒自身にも自覚させるように心がけたい。

②生徒の主体的な学びを促す「めあて」等の設定、指導に生かせる「より具体的な評価規準」の設定

ア) 適切な「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の設定があるか

- ・以下の資料を参考にして、設定すること。

「児童生徒の主体的な学びを促す『めあて』『課題』『まとめ』『振り返り』の設定例」

「主体的・対話的で深い学びを実現するための単元（題材、主題）計画 例」

<http://kyouiku.oita-ed.jp/gimu/2017/05/291.html>

イ) 指導事項・指導領域・評価の焦点化が見られるか

ウ) 単元・指導過程・本時の評価規準に整合性があるか

- ・単元の評価規準→指導過程の評価規準→本時の評価規準という道筋で、整合性をもったより具体的な評価規準（概ね満足できる状況）を設定することが求められる。見取りができていく評価規準は、指導・支援が曖昧になってしまうと考えられる。

エ) 「B 概ね満足できる」状況が具体的に想定され、それを判断する場面や方法は具体的で適切であるか

- ・評価の場面は1時間で1、2箇所が妥当である。

オ) 「C 努力を要する状況」の生徒への指導や支援は行われているか、またその方法（手段）は有効であるか

- ・具体的な評価規準から本時のめあてを設定すること、また、評価規準に基づき「C 努力を要する状況」の生徒を見極め、「B 概ね満足できる状況」になるよう効果的な支援を行うことが必要である。

③参考資料を活用した授業実践

○全国学力・学習状況調査の調査問題

○「全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例」

<http://www.nier.go.jp/jugyourei/>

○中学校国語科指導資料（県教委作成）

○「個に応じた指導の手引き 中学校 国語科編」（県教委作成）

○公立高等学校入学者選抜学力調査

(3) その他、国語科授業で取り組むべきこと

①学習用語の確実な理解

- ・必要な言葉を使用し、言葉で思考を深めることが必要である。そのために、中学校で使用する教科書に掲載されている学習用語は、その学年で確実に理解させることが大切である。既習の用語は授業で使わせ、指導者が曖昧な言葉を使わないようにしなければならない。

②言語活動の成果物の掲示や展示

- ・作成したものを互いに見ることで、生徒の励みになるとともに、ものの見方や考え方が広がる契機にもなる。また、言語活動に関連する資料の紹介も学習環境を整える意味で有効である。

③記述する活動の充実

- ・記述は、「書くこと」の指導だけでなく、3領域の力を向上させるのに有効である。

例（話す・聞く）インタビュー等の取材メモ、スピーチ原稿等
（書く）鑑賞文、図表などを用いた説明・記録、案内、意見文、批評文
（読む）文章を読んで解釈し、自分の考え（感想や意見、評価、批評等）を明確に書くこと。
目的に応じて本文を引用したり要約したりすること。

- ・また、条件に即応して記述しなければならない場面を設定することも有効である。時間・字数・文章の形態や種類・文体・テーマ・対象・使用語彙・要約・引用・例示・技法・構成等、条件を踏まえる必然性のある課題を設定していきたい。

(4) 学校全体で取り組むべきこと

①漢字や語句、文法、表現技法等の習得

- ・漢字や語句、文法等の確実な習得には、繰り返し練習が不可欠である。特に漢字は一度覚えても使わなければ忘れてしまう。繰り返し学習できる環境を学校全体で整えることが大切である。

②全校一斉読書や各教科における学校図書館の活用

- ・様々な力を下支えするものとして、活字に親しむことが必要である。その際、文学的文章だけでなく科学的な読み物等にも手を伸ばすように指導する必要がある。
- ・学年が上がるに従って、本だけでなく、新聞、インターネット、テレビ、ラジオ等の様々な情報を利活用することも求められる。そのために、国語科だけでなく各教科や領域において、図書館活用の推進をしなければならない。